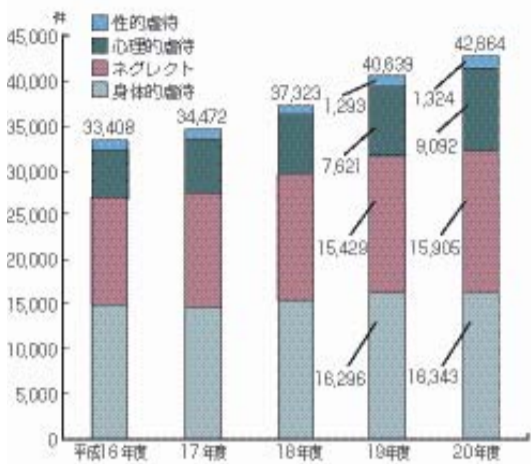


平成20年度 児童相談所における 児童虐待相談の対応件数(確定値)

平成20年度中に児童相談所が対応した養護相談のうち「児童虐待相談の対応件数」は4万2664件で、前年度に比べ2025件(前年度比5%)増加している。これを相談種別に見ると、「身体的虐待」が1万6343件と最も多く、次いで「保護の怠慢・拒否(ネグレクト)」が1万5905件となっている(下図)。また、主な虐待者別に見ると「実母」が60.5%と最も多く、次いで「実父」24.9%となっている。



プロフィール ● 1955年高知県生まれ。89年山口大学医学部卒業。96年さいとうクリニック勤務、院長を務める。99年めだかメンタルクリニック開設。2006年から医療法人青流会くじらホスピタルに勤務。2008年4月医療法人青流会理事長に就任。現在に至る。女性の嗜癪問題(摂食障害、アルコール等)や性虐待、児童虐待(虐待する母も含む)、PTSD(心的外傷後ストレス障害)等を専門に治療にあたる。社会福祉法人子どもの虐待防止センター顧問・アドバイザー。3歳の女の子のお母さん。



「心の傷を見つめて」女性精神科医のレポート 著者/上村順子 発行/新日本出版社 定価/1575円(税込)



「お父さん、こっちを向いて!」女性精神科医からの父親へのメッセージ 著者/上村順子 発行/エクスナレッジ 定価/1470円(税込)



●医療法人青流会くじらホスピタル <http://www.kujira-hp.jp/> 東京都江東区枝川 3-8-25 TEL03-5634-1123

「お母さん」という仕事は、どんな仕事よりも尊いもの。お母さんたちはもっと自信を持ってほしいと思います。

藤本 10代の若者だけでなく、摂食障害に悩む「お母さん」もいるそうです。上村 10代の若者と同様、やはり自身の母親の影響を多大に受けています。子育てはもろろん、料理やそうじなど、あらゆる事が完璧にできない自分を許せないと同時に、子どもが自分から離れ、自由にすることも許せない。両者に共通しているのは、みな「自分嫌いな」ということ。藤本 親からの愛情を満足に受けられず、自己肯定できずに来たことが、さまざまなストレスとなり、結果的に障害となってしまうわけですね。上村 もし「母親」というまじかなければ、おばあさんでも、近所のおばさんでもいい。「あなたに大事。あなたが一番かわいい」と言ってくれる人がいたら大丈夫なんです。自分の存在を誰からも認めてもらえずにきた人が、「お母さん」になっていくらがんばっても、「子育てはやって当たり前」と夫や周囲の誰からも認められずいたら、おかしくなるのも当然でしょう。藤本 この新聞で伝えている、「お母さんはスゴイ」という言葉に救われたというお母さんも、たくさんいます。上村 初めて「お母さん業界新聞」を読んだとき、藤本さんの思いを知り、共感しました。大切なのは、母親が「自分」というものを持つことです。藤本 私はずっと、出会った母親たちに「あなたの夢は何ですか?」という質問を投げかけてきました。それが「自分自身」に向き合う最初のきっかけになるのです。たいがいのお母さんが子どもと夫を優先し、自分のことは後回し。だからこそ私は、「子育てとは、お母さんが夢を描くことだよ」と言い続けてきました。上村 子育て以外に「生きてい」を見出せないお母さんが、子どもをお人形扱った結果「お人形の氾濫」として摂食障害や虐待を起す。もともと日本は「個」がない国ですが、あまりにも大人として成熟していません。「自分」の価値観を持たない大人が大半で、多くの問題はそこにあります。藤本 そういう患者さんたちを、先生はどのように治療していくのですか。上村 薬も処方しますが、カウンセリングも重要です。しかも、「人間って何だろう。自分って何だろう」といった根源的な話からです。「お母さんである前に、ひとりの人間である」ということに気づいてほしいので、私自身が、医師である前に「ひとりの人間」として接しています。藤本 医師と患者は上下の関係と思いがちですが、先生の場合は、同じ人間なんだというところからスタートですね。上村 むしろ、患者さんから学ぶことだらけの毎日です。医学部に入る前に学んだ社会学では、人はみな「よく生きる力」を持っているというところを学びました。病院に来た人はみなとても傷ついている。にもかかわらず、命を落とさず、必死に生き抜いて今日がある。そんな素晴らしい力を持っている人々を尊敬する気持ちで一人ひとりの患者さんと接しています。藤本 患者さんだけではなく、心や病気について、広い理解と協力を求めようという努力はもちろん、地域貢献や医療機関としての先駆的な取り組みという意味でも大切なことだと思えます。最後に、お母さんたちに一言お願いします。上村 追い詰められているお母さんが多いことに、危機感を持っていきます。未来をつくる「お母さん」という仕事は、社会にあるどんな仕事よりも尊いもの。だからお母さんたちはもっと自信を持って、威張っていいと思います。完璧なお母さんでなくていい。子どもは、どんなお母さんでも大好きなんです。今、自分を愛せない人は、とにかく自分を抑えずに、楽しく笑顔でいられることを心がけてください。世の中のしくみや周囲の手助けも必要でしょう。そのために私ができることはやっています。藤本 藤本さんにもがんばってほしいと思います。藤本 力強いメッセージをありがとうございます。今の言葉には、医師としてというより、「お母さん」としての思いがたっぷり込められていると思います。これからはお母さん大学の校医として、お母さんたちのサポートをよろしくお願いします!

「お母さん」という仕事は、どんな仕事よりも尊いもの。お母さんたちはもっと自信を持ってほしいと思います。

「お母さん」という仕事は、どんな仕事よりも尊いもの。お母さんたちはもっと自信を持ってほしいと思います。

対談を終えて

医者らしくない医者。言い換えれば、人間らしい人間。今回ご自宅に伺うと、そこには、病院で見る上村先生とはまた違う表情があった。対談中、上村さんの中にある「医者」の顔と「母親」の顔が交互に見え隠れし、心地よい刺激とやすらぎに、響き合うものを感じた。上村さんが、人々の「心の傷」に向き合うようになったのは、学生時代に「人間とは何か?」のテーマにぶつかったことがきっかけだった。幼い頃は、裏山でターザンごっこ。自然の中ですくすく育った上村さんだが、大人になる過程で、人間という壁にぶつかり悶々と過ごす時期もあったという。そのことが、ひとりの医者の誕生につながっているのだろう。子育てとは、人間を産み育てる大事業。そこに悩みがあって当たり前。人は「困難」にぶつかるたびに、人間らしくなっていく。上村さんが語った「日々、患者から多くを学んでいる」という言葉が、とても新鮮だった。(藤本裕子)



プロフィール ● お母さん業界新聞編集長。お母さん大学学長代理兼1年1組。1956年久留米市出身、横浜市在住。全日空客室乗務員として勤務後結婚、3女を産出。子育てをしながら慶應義塾大学経済学部を卒業。89年『トランタン新聞』創刊。95年トランタンネットワーク新聞社設立。20年間、さまざまな子育て支援活動を展開。2008年春「お母さん大学」を開校し、『お母さん業界新聞』を制作・発行。元気のもと、夢とTUBE。